



会員寄稿

生成A I の活用に向けて

教頭 甲斐 哲也

チャットGPTなどの生成A I が話題になっています。誰もが一度は見聞きしたことがあると思います。今後学校でもその活用が期待されています。

先般、生成A I の学校での取り扱いについて、文部科学省が作成したガイドラインが全国の教育委員会に通知されました。学校内外での活用方法や注意点なども盛り込まれています。A I の活用は禁止ではなく、慎重を期したうえで学校教育での活用を目指すという方向です。活用例としては、グループ学習で議論を行う際に足りない視点を補うことなどが挙げられています。その一方で、著作権の侵害、誤った情報の拡散、個人情報の流出などのリスクもあるとして、読書感想文や詩・俳句などA I で生成した創作物を自分のものとして提出することや、教員が成績につながる評価を行う際に利用することなどは不適切としています。これらの不適切な事例においては、想像力を働かせる、思考を重ねるということはありません。

さて、カナダのメディア学者のマルクーハン（1911～1980）は、メディアが伝える内容ではなく、その形式が人間の思考に影響を与えると説きました。すなわち、一人で書物を黙読し、抽象的な想像力や思考を発達させてきた人間は、20世紀になって、映画、ラジオ、テレビなどのメディアが出現すると、目で見たり、耳で聞いたりできる感覚的なイメージが大量に生産され、現実よりも感覚的なイメージの方に本物らしさを感じるようになったということです。

ましてや、今や情報社会（Society 4.0）に続く、新たな社会（Society 5.0）の到来とされています。人間の能力を超えたA I が、膨大なビッグデータを解析し、その結果がロボットなどを通して人間にフィードバックされることで、新たな価値が産業や社会にもたらされる社会です。もちろん、Society 5.0は、A I やロボットが今まで人間が行っていた作業や調整を代行・支援するため、日々の煩雑で不得手な作業などから解放され、誰もが快適で活力に満ちた質の高い生活を送ることができるようになる社会であり、決してA I やロボットに支配され、監視されるような未来ではないとされています。

確かに、生成A I は、便利なツールであることは間違いありません。使いこなすための力を意識的に育てていく姿勢が重要です。そこで、学校では、情報モラル教育はもちろんのこと、一人一台端末を貸与し、授業での活用や、それを活用して地域課題の解決を図る体験的な活動の実践などを通じて、想像力を働かせる、思考を重ねながら使いこなすための力を育てています。

そのベースとなるのは、一人一人が持っている理性を磨くことだと考えています。ここでの理性とは、ある情報に触れた時にそれを独りよがりにもにやるのではなく、冷静に状況などを確認しながら真実かどうかを客観的に判断できる能力、そして、事実かどうかを確認せずにSNSで拡散させる（これは犯罪につながりますが）などの衝動性を克服できる能力です。これは狭い見の中での磨くことはできません。日々の集団生活の中で多様な価値観に触れて、お互いに共感しながら、時には、対立を克服しながら磨かれ輝いていくものです。このことを念頭に学校での生成A I の活用に向き合っていきますので、御家庭の方でも御協力ください。